
ニブルヘルム

PUT

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ニブルヘルム

【Nコード】

N8065C

【作者名】

PUT

【あらすじ】

主人公『高津慎』の恋愛＋ファンタジックストーリー学校に起きる奇怪な事件の真相と謎のゴーレムとの戦いをお楽しみください

『屈辱』

朝、目が覚めると時計の針が8時15分を示そうとしていた。

「遅刻だ・・・完全に遅刻だ・・・」

高校生活初日ぐらいはまともに登校したかった。

「早くしないと授業にまで遅れるぞ？」

話しかけて来るのはゴーレムのマキシだ、普段は猫の形をしているが実際こいつは魔族。

口数の多い猫だと言う事を理解してほしい。

「うるさいなーだったらお前が起こせば良かったんだろ？」

この会話を何回した事か・・・

キッチンに置いてあったパンを食べつつ紅茶を一気飲み。

カバンを持って学校にダッシュ！

「遅刻だな絶対に遅刻だな初日から遅刻なんて幸先の悪いスタートなこと」

「さっきからうつせーぞ？ゴーレムの癖に黙りやがれ！」

完全に遅刻が確定している俺を見てマキシは嘲笑うかのようにこつちを見ていた。

「つーかなんで猫のお前と人間の俺と一緒に登校してるんだ？」

そうだ、コイツはゴーレムと言っても周りからはただの猫にしか見えない。

それなのにどうして人間の俺と一緒に・・・気に入らないな・・・

「ああ？だつて学校にはアメリカンブルーのハスキーちゃんが居るんだぜ？」

その上この人間様を差し置いて恋愛感情なんて持ちやがって・・・ますます気に入らない奴だ。

「ハスキーちゃんってあの育ちが俺よりも良さそうな猫の？」

「ああそうだけど？」

フツ・・・甘い・・・可哀想に失恋だなこりゃ絶対に振られるに違いない。

「まあがんばれよ！応援してるぜ」

「おう！がんばるよ！」

ううゝその気になりやがって、ムカつくけどコイツ振られたら落ち込むだろうな・・・

「来週で付き合つて3年になるんだ！！」

「あえ？3年？」

話が違うぞ・・・神様どういう事ですか？

3年って・・・俺が未だ中1の時に既にコイツには彼女が居たって事か？

「そうか、それは良かったな！」

猫の癖に生意気な、だいたいいつの間に彼女なんて・・・

「今度ダブルデートしようぜ？」

「アホか！！お前は猫だろ？どうして人間様とデートが出来るんだよ？」

フンツ馬鹿な猫だな、生意気でム力つく馬鹿なゴーレム猫だ・・・

「そつか慎には、彼女居ないモンね？」

動物虐待と言う言葉は動物にのみ適応されるものであってゴーレムには関係ありませんよね？
殺しても良いですか？

「まあまあそう怒るな、学校が見えてきたぞ？」

くそ・・・覚えてろよあのクソの猫・・・
絶対に殺してやる・・・
そんなこんなで学校についた。

「じゃな！マキシ彼女と未永く幸せに」

「おつ」

マキシは学校の壁をスルつと登って屋根の上で待っていたアメリカンブルーのハスキーちゃんと何処かに行ってしまった。

「ヤベッ！？もうこんな時間？」

ホームルームは捨てたとしても授業までには教室に入らなければ・
・

「えつと俺の教室は・・・」

「4階の一番奥ですよ？高津 慎君」

「え？」

俺の後ろに立っていたのは入学式の時に隣に座っていた夜月 馨だった。

始まり

そこに居たのは夜月 馨だった。

「まさか君もこちら側の人間だったとはね、これからよろしく」

なんの話をしているのだ俺には全くわからない。

「何言ってるんだ？」

見た目は普通の高校生にしか見えないが……

「惚けるのはやめて下さいよ、あの猫、ゴーレムでしょ？」

この世界には俺のようにゴーレムと共に生活している人間は珍しくないが……

こいつの様にゴーレムを見分ける人間は珍しい。

「よく分かったな、お前、ゴーレムを見分ける事が出来るのか？」

「ああ見分けれるとも！僕達ヴォイド事務所の人間は悪性化したゴーレムの処分が仕事さ」

悪性化したゴーレム……聞いた事がある、ゴーレムのマスターあるいは創り主が死んだ場合

ゴーレムの理性がコントロール不能に陥り暴走する。

前にも言ったがゴーレムはダークマターから構成されるれっきとした魔族であり

暴れると少し厄介なのだ。

「ヴォイド？なんだそれ？」

「その話しは後ほど、放課後にでも事務所に案内します。」

そう言つてニコツと微笑んで教室の中へと姿を消した。

こいつの教室は俺の教室の隣か……

高校生活最初の授業は数学からだつた。

とは言え授業内容は中学の復習……

俺はこう見えて成績には自信がある、この高校にも特待生として……
・言つのを忘れていた

ここ、晴嵐学園は偏差値86の賢さを超越して頭の狂つた奴の集まる学校。

それにここは私立だからお金も少々掛かる。

しかし俺みたいに入試100点合格をした人は特待生とし学費は免除されるのだ。

午後の授業も別にたいしたことはなかったが少し気になった事があった。

この学校は昨年出来たばかりの未だ新しい学校なのに旧校舎のような建造物が校内に

建てられていたり、水道の水が錆びていたりとにかく気になることが多い。

放課後、俺は校門で待っていたマキシと待ち合わせの場所に行った。その途中マキシが落ち込んでるように見えた。

「どうした？マキシ？」

「ああ・・・」

「ハスキーちゃんアメリカンブルーじゃなくてロシアンブルーだった・・・」

「そっか、アメリカンブルーっていう種類の猫は居ないよな・・・」

「そうか・・・それでハスキーちゃんに振られたのか？」

「可哀想に・・・俺のせいだな・・・俺がアメリカンブルーなどと間違った事を教えたから・・・」

「いや振られてないけど？」

「もうこいつとは真剣に縁を切ってやる疫病神退散！」

「せっかく人が慰めてやろうとしたのに紛らわしい話をするな！」

「夜月に頼んで魔族狩りでもしてもらおうかな？」

「空の主役が太陽から月に代わろうとしている
見ればそこには夜月の姿が」

「おう、待たせたな」

『契約』

すっかり闇が支配する夜になった頃、俺とマキシは約束の公園にいた。

月明かりと公園の街灯に照らされた公園に昼間の活気は無く今にでも幽霊が出そうなほどの恐怖を感じる、

「待つてましたよ、慎君」

「悪い遅くなった、それで聞かせてくれよ？」

「まあまあ焦らない焦らない、お客さんです。」

公園の茂みから飛び出してきた一匹の……犬？……違う……ゴーレムだ、それも悪性化したゴーレム。

その憎悪に満ちた目を見ればすぐ分かる、異様に伸びた爪と牙。

「ふゝ雑魚ですね、レベル1の雑魚です。少々お待ちくださいすぐに殺りますから」

「殺るって……」

夜月は牙をむいて向かってくるゴーレムに顔色一つ変えない。

どうするつもりなのだ。俺は何も出来ないままそこに立っていた。

それは……一瞬の出来事だった。

夜月は自分の体の倍はある大きな槍を取り出しゴーレムを切裂いた。頭蓋骨が陥没して脳みそが出てきている

公園の広場があっと言う間に血の惨劇へと化した。

顔についた血を拭いながら夜月は言った。

「これが僕達の仕事、僕は槍使い『あらゆるものを貫く槍を造型で
きる』」

これはダークマターから成り立つゴーレムを確実に葬るたった一
つの方法」

意味が分からん！

こいつは何を言っているのだ。今殺したのがゴーレムと言う事は分
かった

それとゴーレム殺し？

それなら断るね。俺は絶対にそんな危ないことは・・・

「それじゃ登録しに行こうか？」

「登録？」

「きみもヴォイド事務所に登録するんだよ！そしたらいつも一緒に
居られるじゃん？」

別に一緒に居たかねーしゴーレム殺しもやりたくないのに気が付け
ば・・・

ヴォイド事務所のオーナーの差し出した契約書に目を通して最
中だった・・・

「えつと慎君の武器は何かな？」

さっきの槍みたいな奴の事なのか・・・

俺はそんなもの一度も出した事は無いが・・・

「武器つて・・・俺は一度もそんなもの使った事が・・・」

言い忘れていた・・・言わなくても分かると思うが結局契約書にはサインしてしまったのだ

「自分の意識を利き手に集中させてみて？」

「え？　こうか？」

それは強いけど優しい光だった。

その光が一瞬俺を包み込み視界が真っ白になったそして次に手にしていたのは・・・ナイフ？

俺の武器はナイフだった。

「慎君・・・レストランに行くんじゃないんだから・・・もっとまともな武器を・・・」

俺だってやるんだったら夜月、お前みたいな槍がよかった・・・
しかし今の俺はこれが精一杯だ・・・

「おやおや、それは凄い武器ですよ？」

話しかけてきたのはヴォイドのオーナーだった。

「夜月君？　君が1億人に1人の逸材なら、彼は60億人に1人の逸材ですよ？」

何を言っているのだこのおっさん・・・

「そのナイフ・・・投げてみてください」

俺は言われるとおりビルの屋上からナイフを投げた

『千本のナイフ』

俺は言われたとおりナイフを投げた。

「あえ？」

ナイフが勝手にまるで・・・自我を持つてるかのように・・・

「ホッホッホ、やはりそうですね、貴方の武器は自我を持ってるんですよ武器の造型者の

ターゲットを殺するという主要目的＋その目的を達成するための作戦を独自に考えることが出来る武器、それに今は一本しか出していませんけど この手の武器は何本でも出す事が出来る
もちろん時間が経てば消えてしまいがね？」

なるほど、これが60億人に1人の逸材・・・

あまり自覚は無いがどうやら凄いらしい。

「そうだ、夜月君、高津君、私の夢の中で戦ってみてはどうでしょう？」

私は夢を操る事が出来る。私の夢の登場人物に君たちの自我を移せば夢の中で二人は戦うこ

とが出来る。一種のトレーニングです。終われば元通り死にはしませんし怪我も無いです」

あまり気がすすまないが、その場の雰囲気では俺はオーナーの夢の中に入った。

「二人とも準備はいいですか？ それじゃ開始！-！」

「高津君、本気で来てくださいよ？僕だって本気でいきますから！」

先に動いたのは夜月のほうだった。

槍の造型をしつつ空たかく飛び上がり俺めがけて飛び込んできた。

「・・・クツ」

はい。ナイフがあたらない・・・自我を持つナイフ・・・量産型の自我を持つナイフ・・・

「・・・！！」

俺はあたり一面にナイフを投げた。

大量に散らばったナイフは千本あまり、

夜月は俺の行動見て一旦、空へと引き返した。

「・・・今だ、散れ！！」

俺の叫び声で目が覚めたかのように千本のナイフが夜月めがけて飛んでいく。

「グフツ・・・アツ・・・」

心臓を・・・と言うより全身をナイフで刺された夜月が落ちてきた。

「高津くん、・・・君は・・・強いね・・・」

その時オーナーの声が聞こえた。

「それまで!!」

気が付けば元の事務所に居た。

「見事でしたよ高津くん、あのナイフ裁き、素晴らしいじゃないですか」

「夜月は？夜月は？大丈夫なんですか？」

あれだけのナイフが・・・

「大丈夫ですよ？あれはオーナーの夢ですもの。それより慎くんはすごいな」

慎くんの事がもつと知りたくなったよ、今日は一緒に寝ようか！」

この人はホモですか・・・・・・・・

「はあ？何？・・・」

迂闊にも奴の作戦に乗ってしまったことに俺は気が付いてなかった。

「それってツンデレですか？好きなんでしょ？僕の事が？」

物影からスッとオーナーが出て行くのが見えた・・・

「ちょ？オーナー？何処に・・・」

返事は無かった。

目の前には夜月・・・後ろは壁・・・絶体絶命のところに天使のよ

うな声が・・・

「またやってんの？」
・・・誰？

『廃工場』

そこに居たのは・・・女？

「よう、奈々ちゃんテストはどうだった？」

後で夜月に聞いた話この人は雪城奈々、俺と同じ晴嵐高校の生徒だ。雪城は自分の造型術の訓練とテストを受けてきたらしい。詳しい事はそのうち教えてくれるらしいが、どうやらこの組織はものすごく大きなものらしい。

「新入り？何の造型できんの？」

「ナイフだけど・・・」

「ナイフ？？あんたそれ本気？」

どこかで聞いたことのある会話だ。

よってこの後、オーナーの夢の中で闘う事になった。

もちろん結果は言うまでもなく俺の圧勝。

自我を持つ武器は並みの造型者に負けるはずがないのだ。

「強・・・新入りの癖に・・・」

「そうだ！今から奈々と慎と僕で狩に行かない？」

「狩？？？」

実戦ということらしいけど・・・俺に出来るのか・・・

「場所は3ヶ月ほど前に閉鎖した廃工場ってことでいい？」

「よし、それじゃ行こうか」

「え、お俺も？俺まだ実戦経験がないんだけど？」

「何言ってるの？慎君が一番強いんでしょ？」

確かにオーナーの夢の中では俺が一番だったけど・・・
しかたないな・・・

時刻は00:30

俺達は廃工場に着いた。

暗い夜道を照らしてくれる月の光も工場の中には届かない

「真っ暗だね・・・」

「お、おう・・・暗い・・・」

「だらしないわねー男二人がビビッてどうするのよ？」

そんな話をしながら毎秒10cmほどの超ゆっくりスピードで足を進めていくと

大きな広場みたいな所に着いた。

工場で生産した商品の保管しておく倉庫のようだ。

『ガシャン』・・・『ガシャン』・・・『ガシャン』・・・

「何この音？」

雪城が言った瞬間。

前方に光が二つ・・・目なのか？

次の瞬間『グウォオオオオオオオ』と言う叫び声と共にその光が近づいてきた。

「ダメだ、真っ暗で何も見えない・・・」

「僕に任せて」

そう言うとき夜月は槍を造型して跳び上がり天井を突き破った。

月の光が光る目の正体をあばいた。

3mは軽く超えている・・・人間？のような生き物

爪と牙がやはり以上に進化している。

「人型ですか？これは厄介ですね」

「私が奴の気を引くからその隙に、できる？」

「分かった」

意気がぴったりな二人はそのままゴーレムめがけて突っ込んでいく。雪城は高く跳び上がりそのままレイピアを創りターゲットめがけて攻撃の姿勢に入った。

その間に夜月は低い姿勢から攻撃のタイミングを見計らった。

まずは雪城の攻撃、鋭いレイピアを突き立てる

しかし避けられた。そのまま敵の背後に入り込み体制を整える次に夜月が槍を突き刺した。しかしこれも避けられる。

背後に回りこんだ雪城の2度目の攻撃・・・これも当たらない敵は大きい体をしているが動きが良い・・・
すべての攻撃を避けてしまう。

「クッダメだ避けられる・・・」

その時、ターゲットがコチラをジロつと睨みものすごいスピードで走ってくる

闘いに加わらないところから俺が初心者だと睨んだのだろう。

「慎君！！武器を創って！！」

俺は言われるまま武器を作った両手を広げ一気に1000本のナイフを造型した

それは翼のように僕を包み、突っ込んでくる敵から僕を護った。

ナイフが壁のように重なり盾の代わりになった。

盾と言ってもそれは武器。

1000本のナイフがゴーレムのカラダを次々に貫通していく

内臓が抉られて飛び散る赤黒い血・・・

ゴーレムのうめき声が止まるまで時間は掛からなかった

吹き上がる血飛沫の中に俺は立っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8065c/>

ニブルヘルム

2010年10月28日08時06分発行